

9

怨霊と名誉回復

ところで、道真の左遷が理不尽な処分だということとは、当時の人びともよくわかつていたようである。すでに九州へ流されるさい、道中の人びとから同情を受けている。また、九州の配所を視察した藤原清貫の復命書をみると、大宰府の役人たちも「京下ノ伝言ノ如クンバ、其ノ事甚ダ不便ナリ」といって、京都から伝えられてきた左遷理由は大へんおかしいと批判している。

一方、道真の配所における心境は、五十首近い漢詩によって窺うことができる。その詩を収めた『菅家後集』は、道真が亡くなる直前、京都で親友として心を許した紀

長谷雄のもとに送られてきた。それを讀んだ人びとは、かならずや道真の無実を確信し、その惨めな晩年に涙したことであろう。

しかも、道真が延喜三年（九〇三）二月二十五日、配所で不幸な最期をとげると、その死を悼む声が九州でも京都でも湧き起こったようである。九州では、すでに同五年、道真の門弟で謫地に同行していた味酒安行という人が墓所に御堂を建てたと伝えられる。それが基になって今の大宰府天満宮ができたのである。

ところで、道真が亡くなってから十数年のうちに、反対派の人びとがつぎつぎと死んでいる。とくに首謀者と見られる左大臣の藤原時平は、延喜九年（九〇九）に三十九歳で病死し、また道真に代わって右大臣となった源光も、落馬して水没するという奇怪な死に方をしている。さらに皇太子の保明親王は、時平の娘を妃としていたが、同二十三年（延喜元年）（九二二）、二十一歳の若さでなくなり、その間に生まれた慶頼王も、わずか五歳で夭折してしまった。

このような不幸がつぎつぎ起こると、京都の人びとは、これを道真の怨霊の祟りと考えたようである。『日本紀略』の延喜二十三年三月二十一日条には、皇太子保明親王の亡くなったことに関して、「世ヲ挙ゲテイフ、菅帥（道真）ノ靈魂、宿忿ノ為ス所ナリ」としるしている。そこで朝廷においては、荒らぶる怨霊を鎮めるために、道

真の官職を元の右大臣に復し、加えて従二位を追贈するのみならず、左遷したときの宣命を焼却するという前例のない名譽回復の措置をとっている。

しかしながら、その後もいろいろな事故がつついた。とくに延長八年（九三〇）の六月、清涼殿に雷が落ちたさい、かつて大宰府で道具に事情聴取をした大納言藤原清貫などが即死し、そのショックで醍醐天皇（四十六歳）も病床に伏して崩御される、という前代未聞の重大事故が起こると、人びとはそれをも道真の怨霊による仕業と信じ、すこぶる恐れをなしている。

このような道真の怨霊に対する畏怖は、つぎの朱雀天皇朝になっても、衰えるどころか、ますます広がっていった。そして天慶五年（九四二）ごろ、多治比文字という巫女や神太郎丸という童児に託宣があり、京都の北野に道真の霊を祀ることになったと伝えられる。これが基になって今の北野天満宮ができたのである。

それは、当初おそらく質素な祠堂でしかなかったと思われる。しかし、やがて村上天皇朝の天徳三年（九五九）には、藤原時平の甥にあたる右大臣師輔が、北野社の殿舎を増築し、神宝を献納している。さらに約三十年後の一条天皇朝（正暦四年・九四四）には、朝廷においても、北野社に初めて幣帛を奉り、道真に正一位太政大臣を追贈している。

かくして道真の御霊は、かつて彼を排除した藤原氏にも、また朝廷からも、手厚く祭られるようになったのである。